

## 臨床倫理学入門コース実施報告（佐藤恵子）

京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）及び京大オリジナル（株）主催による、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学入門コース）を2019年8月24・25日に京都大学大学院文学研究科の会議室にて開催しました。

今年で5回目となる本コースの目的は、臨床上で難しい問題に遭遇した際に、「患者の利益を守るのに適切な方策は何か、それを実現する戦術・技術も考えて実践する」ために必要な知識やスキルを身につけることです。日本では、生命倫理学が未発達であり、体系的な教育も行われてこなかったこともあり、医療現場で日々起きている問題に適切に対応できている医療機関は少ないと思われます。たとえば、医学的に回復不能で臨終期にある人に生命維持装置がつけられている場合、まわりの人が中止してあげたくても実際は何もできず、臓器機能が喪失して死亡するのを待つのみという対応をしている場合が多いのではないのでしょうか。日本人の大多数は、死を引き延ばすだけの治療は望まないとのことですから、本人やまわりの人々にもよい状況でないことは明らかであり、だからこそ厚労省や学会は終末期患者に関する指針を提案しているわけですが、現場では、誰が何をどう考えて行動したものがわからなければ、検討することも実践することもできません。そこで、医療者自身が、問題を看過せず、情報を集めて分析し、方策をたてて、戦術も考えて実行する、ということができればかなり風通しが良くなるに違いないと思い、セミナーではこれらのスキルを習得することを目標にしています。

セミナーでは、2つの事例、進行期の10代のがん患者に、家族が科学的な根拠のない治療を求める事例と、意識のない患者の生命維持治療を事前指示書を根拠に中止することの可否について検討する事例を取り上げました。そして、倫理学や法学の基礎知識や倫理コンサルテーションに必要な知識やスキルの講義を挟みながら、受講者には倫理コンサルテーションチームのメンバーになっていただき、相談を受けた診療科（医療者）へどのような助言を返すか、少人数に分かれて議論していただき、全体でも討議をしました。

受講者は、北は北海道、南は九州と日本全国からの60名で、医療者はもちろん、法律の専門家、学生さんも医療系、哲学・倫理学、法学等の各領域の学部生から大学院生まで、実に多彩でした。講師も、児玉聡（文学研究科）、服部高宏（法学研究科）、松村由美・佐藤恵子・竹之内沙弥香（医学部附属病院）、門岡康弘（熊本大学）、長尾式子（北里大学）、ファシリテーターには大庭弘継・立場貴文・西條玲奈・荻野琴・平出喜代恵（文学研究科）、深川良美（医学部附属病院）、鈴木美香（iPS細胞研究所）、松村優子（京都市立病院）と複数領域から参集いただき、文理融合の学際的な内容を提供することができました。

グループに分かれての話合いは（懇親会でのおしゃべりも）、たいへん活発に行われ、これは受講者の問題意識の深さや背景の多彩さによるものと思われます。受講者のみなさんからも、いろいろな立場の人と交流したり意見交換できたこと自体がよかった、体系的な講義を聞きもやもやしていた部分がスッキリした、うちの病院のスタッフ全員に受講してほしい、などよい評価をいただきました。セミナー主催側の課題としては、受講者には臨床倫理委員会やコンサルテーションチームを運営する立場の方も多く、臨床倫理の問題の対応がきちんとできるようになるようにモデルを提示する必要があることや、倫理問題になじみがない人であっても「どう考えたらよい

か」の道筋が見えるような工夫があれば役に立つかなと思いました。

そして、私も教育する立場として、また、臨床倫理コンサルタントとして多くの事例を経験する中で課題として思うのは、人の生き死にの問題を考えるには、自分自身の人間観や生命観・自然観が必要で、それが医療者や患者とうまくつながらなければ解決しないので、どうしたらその部分を涵養することができるかということです。問題を考えるときには、法令や倫理原則は必要ですし、四分割表などのツールも便利なものは何でも使いますが、やはり大事なものは、それらを踏まえた上で「自分自身はその患者がどうなることがよいか」を考えることであり、全ての関係者が考えて検討しないといけないということです。これが可能となるしかけを考えたいと思います。

今回は、思いのほか多くの方にお申し込みいただいたこともあり、会場が手狭になってしまったのですが、互いの息づかいがわかるような近さで熱く語り合うことができたのはよかったです。そして、事前の準備から当日の運営までお世話くださった京大オリジナルのスタッフのみなさんのおかげで、円滑に実施することができました。あらためて御礼申し上げます。

佐藤 恵子